

7月4日 テモテの信徒への手紙I 2章1~8節 今日の説教から

説教題：「まずは静かな祈りの姿勢から」

少し前の礼拝の中で、私は「文章を作ること」を自分の不得意なことの代表として挙げました。祈祷会や礼拝のために日々いくつもの文章を作る「牧師」という職業に導かれたことの数奇さを感じずにはいられないのですが、特に私は「最初の一文字を書く」という事が極端に苦手でした。どう書き始めればいいのか苦しむ中で、その苦手意識を克服したきっかけは、友人から「まず何でもいいから一文字書いて、思いついた単語を書いて、書きたい文章と関係なくともいいから一つ文章を書くといい」というアドバイスを受けたことでした。どうやら私たち人間は、「一度始めたことを続ける」という能力が優れているようです。だからこそ、どういった文章を書くか頭の中で悩んでいるのではなく、とりあえず一文字書くことで、一つの文章を書く「最初の一歩」を踏み出すことが出来れば、自然と筆は進み続けるものなのだ、と教えてもらいました。

しかしながら、説教というものは普通の文章とは少し勝手が異なります。エッセイやコラムであれば、面白い文章を作ったり筆者の体験を存分に語ればいいのでしょうか、説教は「牧師が言いたいこと」「伝えたいこと」ではなく、「神様が伝えようとしている事」「イエス様が、私たちに知ってほしいと思っている事」を伝えることが必要になります。イエス様の言葉や旧約聖書の言葉を使って自分の主張を信じさせようとする人々、「偽教師」のようにならないように気を付ける必要があるのです。

今日の聖書箇所では、パウロはそのような偽教師に気を付けながら「信仰と正しい良心」をもって信仰生活を続けるために必要なことを教えます。それが、「願いと祈りと執り成しと感謝をすべての人々のためにささげる」というものでした。

神様は、「すべての人々が救われて真理を知るようになる」ことを望んでいます。世のすべての人々がそれまでの自分が「自分中心」という罪の中にいたことを自覚し、そのような生き方ではなく「神様中心」という正しい生き方へと変わることを望んでいます。そのためには独り子イエス様をこの世に遣わして真理を伝え、十字架の贖いと復活の希望によってそれが確かなことを世に示しました。

この福音をすべての人々に告げ知らせることが、パウロに課せられた使命でした。福音を伝え、すべての人々が悔い改めて信仰に入ることが出来るように、パウロは宣教者として語り続け、使徒として多くの教会を作りあげ、また異邦人を導く教師としての使命を受けて、「正しい信仰」を教え続けました。そのパウロが「信仰と正しい良心」をもって行動し続けるために必要なものとしてまとめていのが、「怒らず争わず、清い手を上げてどこででも祈る」という事です。

私たちは祈りによって神様の望む生き方のまず第一歩を踏み出すことが出来、平和を実現するものとなることが出来ます。イエス様が私たちの間に現れて「シャーローム」と語り掛けてくれるような、積極的な平和を私たちは祈りの手によって実現することが出来るのです。時に慎重になって、誰かと関わることを恐れてしまう私たちですが、私たちは祈りによって踏み出したその一步目によって、自然と神様に支えられた信仰の歩みを続けることが出来るのです。その喜びを胸に、今週一週間の、これから歩みを共に進めていきましょう。